

## マリン&レクリエーション実習のプログラム評価に関する事例研究 —女子大学生の自己概念の変化に焦点を当てて—

○井澤悠樹（大阪女学院大学） 松永敬子（龍谷大学）

キーワード：マリン&レクリエーション実習 自己概念 プログラム評価

### 1. はじめに

本学で開講されているマリン&レクリエーション実習（以下、マリン実習）は、夏季集中授業として2泊3日で実施されており、今年で13年目を迎えた。本実習は短期大学生・4年制大学生共に2年生時の必修科目である身体活動の1つであり、マリン実習のほか、ウィークリー種目としてレクリエーション実技など3種目が設定されている。学生はマリン実習を含めた計4種目の身体活動から1つを選択し、いずれかの身体活動を履修するわけであるが、マリン実習は毎年定員を超える希望者がおり、その為、抽選によって履修者を決定しているほど人気のある種目となっている。

本学で開講されているマリン実習は、レクリエーションや運動・スポーツに関連する資格取得の為の実習ではなく、『自然の中に身を置くことにより、自己や他者に対する「気づき」を深めること』を実習の根底に添え、自身への気づき、他者との相互理解、自然への理解の3点の目的を設定し、野外という非日常的な場面において、あくまでも学生自身の成長を見据えて開講されている。金子(2001)も教育現場における野外活動の意義として、自然への理解を深めることに始まり、感性や知的好奇心の育成、創造性や向上心の育成、また、親和・協調性の育成や自律・自発性の育成、自己拡大、自己客観視などを挙げており、それらの効果も多くの先行研究によって報告されている。

以上のように、人間的成長をおおいに促すことが可能となる野外活動ではあるが、実際に本学のマリン実習が学生自身の気づきを深めるきっかけとなっているのかは、明らかではない。そこで本研究では、学生の変化を定量的に評価することで、マリン実習のプログラム評価を試みる。具体的には学生の自己概念の変化に焦点を当て、実習前後での比較分析を行なうことで、マリン実習のプログラム評価を試みる。

上瀬(1994)によれば、自己概念は「人が自己について持った知識であり、まとまって概念化され構造化されたもの」としている。また梶田(1985, 1988)は、自分自身に対して抱く意識や気づきを「自己意識」とした上で、自己概念とは「人が持つ自己意識を暗黙のうちに支えている基盤的な構造概念」と説明している。言い換えれば自己概念とは、自分自身を主観的に捉えた評価であり、自分から見つめた自分(影山ら 2001)と説明することができる。つまり、実習参加による自己概念の変化を明らかにすることで、実習目的達成の為に設定されているプログラムが学生に対して有効に作用しているのか否かを評価することが可能であると考えられる。

### 2. 研究目的

本研究は、学生の自己概念の変化に焦点を当て、実習前後の比較を行なうことでマリン&レクリエーション実習のプログラム評価を行うことを目的とする。

### 3. 研究方法

本研究におけるデータの収集は、pre-test・post-testの2度に渡って行った。各調査とも回収数(率)は35部(100%)であったが、データクリーニングの結果、pre-test・post-test共に有効であるデータを抽出した結果、有効標本数(率)は27部(77.1%)であった。

調査項目には個人特性と自己概念を設定し、自己概念の測定には自己成長性検査31項目(㈱日本キャンプ協会 2006)を援用した。

### 4. 結果及び考察

#### 1) 対象者の特性

表1は対象者の特性を示したものである。現在、定期的な運動・スポーツを実施している者(週1日以上の実施者)は33.3%であった。過去に運動・スポーツの経験がある者は80%以上おり、野外活動経験も半数以上の者が経験者であった。

表1 対象者の特性

所属	(n)	(%)	野外活動経験	(n)	(%)
短期大学	14	51.9	ある	16	59.3
4年制大学	13	48.1	ない	10	37.0
合計	27	100.0	無回答	1	3.7
現在の運動・スポーツ習慣	(n)	(%)	合計	27	100.0
週3日以上	3	11.1	平均回数	5.2回	±3.9回
週1~2日程度	6	22.2	運動・スポーツに対する嗜好	(n)	(%)
月に1~2日程度	5	18.5	好き	14	51.9
年に数回程度	7	26.0	どちらかと言えば好き	9	33.3
全くやらない	6	22.2	どちらかと言えば嫌い	4	14.8
合計	27	100.0	合計	27	100.0
運動・スポーツ経験	(n)	(%)	野外活動に対する嗜好	(n)	(%)
ある	24	88.9	好き	18	66.7
ない	3	11.1	どちらかと言えば好き	6	22.2
合計	27	100.0	どちらかと言えば嫌い	2	7.4
平均年数	7.5年	±4.4年	嫌い	1	3.7
			合計	27	100.0

また、運動・スポーツ、野外活動それぞれに対する意見を聞いたところ、共に80%以上の者が「好き」、「どちらかと言えば好き」と回答しており、身体を動かすことや、自然の中での活動に好意的な意見を持ち合わせている者が比較的多いことが伺える。

#### 2) 自己概念及び下位尺度のステージ間比較

表2は自己概念及び各下位尺度のステージ間比較を示したものである。自己概念において、pre・postのステージ間に統計的有意差は認められなかった。また、下位尺度である4因子においては「努力主義」因子のみ、統計的に有意な向上を示す結果であった。

表2 自己概念とその下位尺度のステージ間比較

	pre (n=27)		post (n=27)		t値	d.f.	
	mean	S.D.	mean	S.D.			
自己概念	104.15	11.23	106.19	12.07	1.32	26	n.s.
【下位尺度】							
達成動機	28.30	4.80	28.56	5.54	0.34	26	n.s.
努力主義	30.30	3.50	31.78	4.12	2.46	26	*
自信と自己受容	20.26	5.41	21.52	6.14	1.79	26	n.s.
他者意識	25.30	6.26	24.33	5.55	1.10	26	n.s.

\*p<.05

・自己概念を構成する全31項目の合成変数を算出し、その平均値の差の検定を行った。

・各下位尺度を構成する項目の合成変数を算出し、その平均値の差の検定を行った。

下位尺度の「努力主義」のみが統計的に有意な向上を示した結果であったが、初めて挑戦するマリンスポーツに対して、初めは上手くいかないことが多くても、自身が努力し、目前にある課題を達成するという明確な成功体験の繰り返しがこの結果に反映されていることが考えられる。

尚、発表当日は結果及び考察の詳しい報告を行う。